徒然ひっきー

辰屋　千早

通勤する小学生

こんな私にも、学生の時代があった。ただ、齢を重ねるにつれ、人生という分母は大きくなるが、学生時代という分子は一定である。それは、常に人生における割合が低下傾向にあることを意味しているが、そこには、単純な定量評価では見いだせないものがある。

過去は美化されていくものである。それは、必ずしも批判的な意味ばかりではない。質の良いワインの澱(おり)が、自らを澱となすことでワイン全体を純化させていく場合もある。私の過去はワインセラーに入れて大事に保管されるものではないが、年代毎に分けられ、いいかげん黴臭くなった脳内に雑然と記憶されていく。

省みるに、私の学生時代は総じて幸福と言えるだろう。勿論さっき述べたような美化作用も含めての概論である。私の育った家庭は中の下という、一億総中流時代にあって、至って平凡な評価を下すにふさわしいものであった。それに見合わぬ私立中学校への進学は、受験という期間も含めて、生活面でも、金銭面でも親に相当の負担を掛けたに相違ない。

小学校の時、私は塾に通うために「通勤定期」を持っていた。綿密な計算の結果、若干ながら安いという検討結果を携えて、親にねだったのである。まぁ、そのような交渉をする時点で、小学生としては相当に可愛らしさに欠け、ひねた子供であったということであるが、万単位の金額の出費の買い物を子供自身にさせるという親の信用も大したものである。もちろん、私はその信託に答えてちゃんと購入したわけだが、当時は子供がそのような「通勤定期」を買うのは珍しかったのか、地下鉄の定期券窓口のおじさんが怪訝そうにしていたのを覚えている。仕方がないではないか。塾は学校ではないので、「通学定期」のような格安チケットの対象外なのである。

斯くして、小人料金の通勤定期というレアアイテムを携えたマセガキは、放課後の片道1時間の塾への「通勤」をそれなりにエンジョイしていた。同じ塾へ「通勤」する仲間がいたこともあるし、時間・移動方向の点で、本当のラッシュに遭遇することもなかったためでもあるが、それだけではない。「通勤」の楽しみ方を覚えたからである。

最初に覚えたのは、電車の乗り方である。乗り方と言っても、切符の買い方とか、そういう話ではない。どの位置で乗車すると、何両目の何番目のドアで、到着駅の階段に一番近いのはどこか。乗り換えを含め、どのような位置取りをすれば、ホーム上での無駄な移動を最小限にできるか、ということである。

但し、理論は構築しても実践するかどうかは別問題である。電車の中で座して時間をすごすには、電車は様々な魅力に溢れていた。例えば先頭の展望である。当時の私の「通勤」経路は、最寄りの地方私鉄の駅に行き、私鉄に乗ってJRの駅で乗り換え、JRからメトロ直通乗り入れ、というスタイルであった。最初の私鉄の車両はバラエティに溢れていた。大半が親会社からのお古だったためである。比較的オーソドックスな、旧来の電車然とした車両は、先頭の眺めも良かった。先頭車両からの、特に貫通扉から見える風景は、その昔、「電車でGO!」というゲームがあったが、あの映像そのものである。対して、JRや東京メトロの車両は、先頭からの展望にいささか欠けていた。地下運行の多いその路線の車両の先頭には、客室内の灯りの映り込みを避けるように設置されていた。そもそも地上部分の少ない路線に、車窓の楽しみはあまりなかった。

先頭の魅力に取り憑かれた私を次に誘惑したのは、運転席の計器類である。速度計、電圧計、電流計、圧力計。私鉄車両の、特に古い車両のそれらは、解説など不要なアナログメーターであり、しっかりと日本語表記されていた。速度計は一番わかりやすい計器である。車両の進行方向速度である。ただ、子供心に、なぜ逆方向に進んでいても正の値を示すのかは不思議であった。電圧計は動かず、常に一定の値を示している。1500V。首都圏の東京付近は全て直流電化されており、基本的に1500Vの架線電圧である。乾電池1000本分という電圧に圧倒された。圧力計は、制動に使う元空気だめの圧力と、制動弁に伝わる圧力の2針式だったと思う。これは運転手の右手にあるブレーキ弁の操作を如実に反映していた。終点の駅で取り外されるそのハンドルは、今でも欲しいアイテムの一つである。当時の電車は電気的(電子的ではない)かつメカニカルな魅力に溢れていた。それは今の電車にも有ることは有るのだが、いささかアナログ感に欠けてきた気はする。

要するに、現在の私のオタク的要素のプラットフォームを形成しているのは、この幼少時代の知的好奇心であると思う。俗に「鉄分」という奴である。カラクリの構造への好奇心は、世界の構造、社会の構造、人間の構造へとその広がりを見せる。好奇心を満たすという知的行為は、人間に許された非物質的活動であるが、それが創造的・生産的活動に繋がるかどうかは、それを行う人間次第なのであるが、残念ながら私を含め多くの人間はその武器を使いこなせずに一生を終えるようだ。

挫折する小学生 ー楽器と音楽

楽器と音楽について語ろうと思う。私が習い事として楽器を始めたのは、小学校4年の時だったと思う。今にして思うと、習い始めとしては、特に楽器の場合、非常に遅かった部類であろう。両親は、ちょっとした出来心で、恐らくはクラッシック音楽などの高品位な楽曲への興味を起こさせようと思ったのか、ピアノを習うかというような提案をしてきた。ひょっとしたら私よりも妹の方に期待をしていたのかもしれない。

果たして楽器屋に連れていかれた私が選択したものは、違う楽器であった。電子オルガンである。ヤマハの製品であったので、商標的にはエレクトーン。こちらの方が通りが良いかもしれない。黒光りするボディに白と黒の鍵盤という、絶対的なモノクロームのピアノよりも、電子オルガンのたくさんのスイッチの方が、子供心にも未来的に写ったのであろう。いや、この歳になってすら、そう思える。そしてなんと、足にまで鍵盤があるのだ。

斯くして、私は妹と共に音楽教室に週1回、通い始めた。通い始めてすぐに、私は妹に対して申し訳ない気持ちになった。彼女は小さかった。足が届かないのだ。教室には、幼児用のブースター鍵盤の類があったように記憶しているが、家には無い。私の選択が、彼女にちょっぴり不幸をもたらした。そして不器用で幼かったことも有り、妹は単なるオルガンとして練習を始めた。そして程なくリタイアした。

電子オルガンの演奏は全身を使う。何せ「電子」な代物なので、製品の進化は激しいので現在のモデルとは異なるが、当時の私の演奏技術の範囲では次のようになっていた。

右手：上鍵盤で主旋律担当。
左手：下鍵盤で和音（コード）担当。
左足：和音の、主に根音（ルート）担当。要するにベースだ。
右膝：サステインレバー担当。目立たない役回りだが、音の表現が広がる。
右足首：メインボリューム担当。これも音の表現に重要。
右足親指：リズムボックスコントロール（開始・停止）。これが一番目立たない。

今にして思えば、結構な手間である。

私も2年程度で挫折した。塾との両立が難しくなったこともあるが、それはある意味、口実であった。左手の指が思うように動かない。それは分散和音が入り始めたころから露呈した。いわゆる、アルペジオである。右手の指は主旋律を担当するので、単音演奏には慣れていたが、基本的にコード全押しから入る電子オルガンでは、ここが一つネックになる。ピアノから転向する場合は、Hanonなどでフィンガーレッスンをする。私もこの問題の結果Hanonをピアノでやらされることになった。その結果、またも問題が露呈する。ピアノと電子オルガンの違いの一つ、鍵の重さである。特に小指にとって、その鍵の重みは悲しいほどであった。

好きな楽器ではあったが、音楽に対する挫折を、それも人生の経験における恐らく初めての挫折を感じさせてくれた電子オルガンは、こうしてリビングの置物に成り下がった。どうせ置物になるのであれば、ピアノの方がマシだと両親も思ったことであろう。

挫折する大人 ーヤンデル

久しぶりに「ひきこもり」の神、いや小悪魔が降臨された。この本のタイトルに導かれたのかもしれない。折角なので、紹介しておこう。彼の名はヤンデル。ヤンデレではない。

今日、仕事に行こうと思うと、妙に肩が重かった。いや、肩だけではない。全身が重い。吐き気もする。私はすぐに分かった。ヤンデルが来たのだ。これは仕事に行けそうにない。いや、行ったら死んでしまう、と思った。仕事場に連絡し、朝の薬と抗不安薬(マイナートランキライザー)を飲み、そのままベッドに戻る。久しぶりとはいえ、ここのところ調子が良かったので不意打ちを食らった気分だった。

あ、引かないで下さい。別に本を間違ったわけではないのです。厨二病でもないです。本の中で時間が現在に戻っただけです。ヤンデルは現代医学では「うつ病」などと呼ばれているものです。「そう病」よりは、よほど大人しい奴です。この本のアオリ? の文中に出てくる「パートタイムひきこもり」の元凶でもあります。まぁ、流行りの擬人化の流れですかね。

ヤンデルはおよそ2年半ほど前に私の元に転がり込んできた。さっき「彼」と言ったが、性別も分からない。便宜上「彼」と言っているだけで、「彼女」かもしれない。まぁ、性別を間違えたところで、ヤンデルは文句を言うまい。彼は何も語らないのだ。彼は何も言わず、私の体をベッドに引き寄せ、少しでも離れようとすると吐き気や目眩を起こさせる。ヤンデルは私の自律神経というのを好き勝手にいじくるのだ。

彼に憑かれてしまったのが、私の大人としての何回目かの挫折である。結果として、私は1年半の間休職することになった。そして、復職も完全なものではない。パートタイマーである。

人は言う。ヤンデルはストレスの子であると。ではストレスは誰の子? それはその人によって異なる。いずれにせよ、ストレスがそいつの子だというならヤンデルは孫。ヤンデルの祖父や祖母にあたるのだろうか。彼らは私の近傍に三世代同居しているらしい。ヤンデルに引越しをさせるには、その祖父母を引越しさせる必要があるのだが、こればかりは簡単にはいかない。私はヤンデルの戸籍謄本を取り寄せた。父方を辿ってみて、納得した。見知った名前だった。

ヤンデルの呼び名は様々である。うつ病、心身症、自律神経失調症、適応障害。最後の適応障害の筋の業界用語で、ポイズンピープルだか、ピープルポイズンというのがある。使う人によって語順がマチマチなのは私の責任ではない。とにかく、祖父母はその辺りであろうと、私は見当を付けた。私は困った。

祖父母が、事象や物やあるいは仕事の内容だとか、そういうものであれば、排除することも可能だ。実際ヤンデルの排除には、祖父母の排除が第一選択であるのは業界の常識である。しかしそれが不可能な場合もある。祖父母が人やもっと大きな環境である場合だ。その場合は、妥協するしかないのだろう。薬でごまかしたり、認知行動療法でストレスを小さくしたり。その結果として、私は現状に甘んじている。前述のパートタイマーである。私は、リアルでもパートタイマー、そして「ひきこもり」もパートタイマーという中途半端な状態なのだ。ヤンデルが出てくる回数は減ったけれど、いつも彼はそばで私を見ている。しばらく、彼は引越さないらしい。

勉強する大人 ー専門書

そもそも私が文章を書くようになったのは、前頁で書き記したヤンデルのせいである。元々、子供の頃は作文を書くのが嫌いだった。その大きな理由は「書かされる」という精神的な抑圧と、「鉛筆で原稿用紙に書く」という肉体的な苦痛に依る所が大きい。近年、ワープロからパソコンという技術の進化により、後者の苦痛は大幅に削減されたものの、前者については、社会人になっても「書かされる文書」が多かったこともあり、さして改善されたとは言い難い。しかしながら、書くという行為に対する抵抗というか、障壁はかなり緩和された。ありがたいことである。

ヤンデルのお陰でお休みを頂くことになった私は、復職の望みが有るのか無いのか分からないまま、ただ無為に日々を過ごしていた。言わばNEET状態である。しかし、誰も好き好んでそんな状態に陥ろうとは思わない。最初の内は薬を変えたり増やしたりして、その度に不定愁訴に悩まされていたが、段々と落ち着きを取り戻し、ぼーっと過ごしていて良いという公認NEET状態を甘受していた。そのうち、自分の行く末が不安になってくる。元の職場に戻っていいのか? 戻るシナリオは? などと色々考えた挙句、戻らないケースについても検討してみた。その時、ふと目に止まったのが「冲方丁のライトノベルの書き方講座」という本である。取り敢えず買って読んでみた。

すると、おかしなモノで、真っ当なモノが書ける訳も無いのに、試しに書いてみたくなった訳です。書くに当たって、何を考えたかというと、プロットは勿論ですが、設定を謎だらけにしたくて、取り敢えず使えそうなネタを勉強してみることにしました。まずは科学的考証が欲しかったので学術書、というか大学レベルくらいの教科書です。予てから、自分の飲んでいる薬の機序やら色々と調べて、自分の中で何が起こっているのか、自分の中で考証を重ねていたこともあり、大学の時に選択していなかった、生物関係、それも細胞生物学とか、分子生物学系の本を漁ってみました。この辺りは丁度その時、「パラサイトイブ」を読んでいたことも影響している。教科書レベルで載っていないことは、英語の論文などをインターネット検索で読み漁った。

科学的考証にエッセンスを加えるべく、次に手を出したのは宗教である。「宗教に手をだした」というと新興宗教にでも入信したように聞こえるが、そうではなく、宗教についての専門書を読んでみた。できるだけマイナーかつ聞いたことがあるくらいの感じで「ゾロアスター教」についての書籍である。世界史を習った人なら耳にしたことはあるだろう。或いは、SF映画の古典的名作「2001年宇宙の旅」のテーマ曲といえる「ツァラトゥストラかく語りき」を思い出す人もいるだろう。とにかく、ゾロアスター教の本を買って読み、その派生で経典の原典アヴェスタを読もうと、アヴェスター語も調査したが、これまた英語のサイトばかりで少々難渋した。

肝心の小説の方は、とある出版社の新人賞用のレギュレーションを目標に書いてはみたものの、指定ページ数を遥かに超える枚数になってしまい、後から読んで幻滅したのでお蔵入りとなってしまった。まぁ、その副産物を含め、知的好奇心を満たす良い暇つぶしにはなったと言えよう。

勉強する高校生 ー通信教育

何故か勉強する話ばかりが続くのは、途中から決めたこの本のタイトルルールに従うため読者諸氏には申し訳ないが辛抱願いたい。

高校生の時の勉強と言えばもちろん、「大学受験」である。これに異論がある人も居られると思うが、一応、当時の私の中の名目としてはそうだった。ただ、予備校の類は殆ど行かなかった。一教科、英語だけYゼミに行った記憶はあるが、週1回の授業で、対して役にたった記憶は無い。夏期講習も行かなかった。夏期講習の金があるなら、部屋にエアコンを付けた方がマシと主張し、自室にエアコンを付けさせた。学校も補講みたいなことはしてくれたし、夏休みとはいえ、さして暇を持て余すこともない。

じゃあ、どうやって勉強していたのかというと、通信教育だ。毎週テストを解いてポストに投函する、アレである。あの手のものは、カンニングしても全然構わない。ただし、カンニングしても全然分からない問題が出題されている。要するに、本来の大学受験レベル以上の問題を何を使っても良いから、どうにか解かせることにより、大学受験レベルの問題に対してマージンというか余力を持ってもらうというのが狙いであろう、というのは私な勝手な解釈であるが、実際、これが参考書を頼りにどうにか解ければ、大学の入試など、そんなに問題ではない、という感じはした。それで良い点数を取れれば、ランキングに入る。答案と共に全国のランキング表が出る。一芸に秀でればいいと思った私は特定の教科、「化学」にのみ力を入れていた。いや、一応物理や数学や英語も教科としては取っていたが、ランキングに載るレベルでは無かったというのが正しいのだろう。化学だけは、ひたすらベスト10に載ることを目指していた。中でも、取り分け有機化学に力を入れていた。これは単純に「無機より有機の方が複雑で難しそう」という思考というか嗜好に基づいていた。そのため、大学の教科書などにも手を出した。上下巻からなるその有機化学の教科書を、飽きること無く読んでいた。

またこのランキング表では、実名ではなく、ペンネームで掲載される。筆名というかハンドルネーム的な概念による匿名性(とは言っても他にも同じ通信教育を受けている生徒がいたので、学校内では誰が誰だか把握はなされていたが)、或いはの面白さに目覚めたのもこの頃といえよう。

ただ、今思い出すに、毎週欠かさず提出するのは結構大変だったようで、机の引出しに溜め込んでしまったことも有ったように思う。つい今しがたまで、忘れていたが、思い出というのは不都合なことは忘れがちである。

もちろん、志望大学の過去問やら、模試の類は受けていた。まぁ、そうした模試で別段「志望校変更の余地あり」という判定を受けた覚えも無いので、取り敢えずはよかったのだが、今にして思えば非効率な勉強のやり方である。それでも特に苦しさを覚えることもなく、やり遂げたのは幸いである。

最近も話で聞くと、当時とはだいぶカリキュラムが変わっているようで、数学と物理など科目間での整合性が取れているのか心配になってくる。私の時にはそうした歪を感じがことは無かったが、日本の将来を考えるとちょっと心配する、今日この頃である。

嗜む高校生 一峠の茶屋

　高校の時の勉強の話はしたが、実際にどのような生活をしていたのか。高校の時は基本的に、家と学校の往復だけである。まぁ、たまには学校から比較的近かった秋葉原などにも行った。当時の秋葉原は今とは全然違う、本来の電気の街だった。
　学校では、教室以外に居場所があった。化学準備室である。化学準備室は化学実験室の隣にあり、エアコンが入っていた。特に夏場など、質実剛健を校是としていた学校の教室にエアコンなどはなく、教諭だけは涼しい思いをしているという、許しがたい状況にあったわけだが、教職員室は溜まり場にするわけにも行かない。そこで、目に付けたのが特別教室棟の化学準備室であった。当時コンピューター同好会の顧問もされていた化学教諭が主となっていたその部屋には、マイコン(当時はパソコンなどとは呼ばれていなかった)と、その教諭の好物であるところのコーヒーを喫する設備が備わっていた。そこは一部のマイコン少年たちの溜まり場になっていた。暗黙のうちに、生徒達は交互にコーヒー豆を供給することで、そこでの居住権を得ることに成功した。
　学校は丘陵地にあったため、普通教室棟の１階と、特別教室棟の建物のベースラインは２フロアほどの差があり、特別教室棟の４階に化学準備室はあった。教室からそこまでの移動には、大量のポテンシャルエネルギーの喪失と、再獲得が必要であった。そのため、そこは仲間内では「峠の茶屋」と呼ばれていた。
　若い生徒の力でコーヒーミルはゴリゴリと音を立てて豆を挽く。同時にコンロにかけたヤカンで湯を沸かす。ペーパードリップとサーバー。ペーパーフィルターとコーヒーの粉を入れたドリッパーに、少しずつお湯を注いでいくと、辺りにコーヒーの香りが漂い出す。
　職場が溜まり場と化した代償として、化学教諭はデータやプログラムの入力をするなどの指示をすることもあった。それらも半分は趣味が入っているような面子であったので、苦になるわけもなく、交代で作業をこなしながら、コーヒーを飲む放課後は、高校時代の良い思い出として、今も鮮やかに思い出される。